

新らしい保育と幼児の保健

愛育研究所長
醫學博士

齋藤 文雄

○保育事業と保健問題

戦争以來すべての仕事が停頓して少しも進展しない。わけでも乳幼児のやうな子供に關する問題にいたつては猶更のことである。幼稚園保育所の問題にしても、果してどうであらう。本年になつて戦前の何割が復活してゐるか。おそらく一割にも満たぬ數字であらう。戦争によつて災害を被つてゐない農村ですらこの春の季節保育所の開設數は實に少なかつた。幼稚園保育所の經營者にはそれぞれ立派な理想と方針があつた筈である。それらの場所へ子供をよこした家庭にも求めるものがあつた筈である。經營者側は今日の社會的情勢に順應して從來にも増した熱意と期待をもつてゐる譯であるが、家庭で「早く開いてほしい」といふ者は都會でもその數は少い。この種の人々の施設利用の意圖は何處にあつたか。これは經營者側としても、一應充分に検討しなければならぬ問題であらうと思ふ。頼みにくる時は「よい躰けをしたいから」「人の前に出て恥かしがらないやうにしておきたいか

ら」「きちんとした生活をさせたいから」「家の手がないから」色々な理由を述べる。しかしそれが本當に衷心からでた理由なのかどうか。今後の幼稚園保育所經營には家庭の眞の要求を正しくきいて、その線に沿つた經營をしてゆくことが必要ではないか。何故ならばいかに敗戦だからといつて、こんな沈滞狀態は考へられないからである。家庭側の幼稚園觀が痛切な要求でなく、有閑的な存在として觀念づけられてゐなかつたかを憂ふるが故である。これは殘念なことである。經營者側もこの際何故さうなつたかをよくよく振り返つて見る必要がないであらうか。やつぱりこんな問題は單なるペーパープランを子供や家庭におしつけるのでなく、もつと家庭或ひは社會的情勢と有機的に結合したプランが必要ではないかと思ふ。幼児の保健問題を稱へても從來の幼稚園經營者達の多くは、保育案の隅の方にちよびり附録としてくつついてゐるのが保健問題のやうに考へてゐた。自分達は醫師を囑託してあるから、自分達は保健の教養がないからといったやうな事を理由に敬遠してゐた傾向はなかつたか。子供は卑屈

であつてはいけないといふ。然し精神の發露がいかに子供の健康と關係があるかを研明する努力はしない。子供の文化といふものは身體の健康といふ草の穂に咲く花であつて、文化だけが存在するものではないのである。教育を受けなかつたからといつて、幼児の保健問題を勉強する努力を惜む保姆があるとしたら、私はこれからの保姆として充分な資格は與へられないと思ふ。

○保育者と保健問題

このごろの幼児の保健問題について執筆せよと命を受けたのであるが、こんな病氣が流行るからこうすればよいといふやうな記事はいくらでも書ける。從來筆者も随分そんな記事を取扱つてきた。しかし、もう倦きた。何故に倦きたか。それは單なる一人の醫師の言葉として受取られ、保姆の幼児教育の中にそれが生きて來ないからである。つまり讀むひとの頭の中に保育といふレディメイドの枠があつて、それ以外に一歩出やうといふ進歩性が乏しいと見られるからである。幼児教育の本當の目的が心の正しい伸しかたにある事は知つてゐても身の方を同時に考慮しなければ役に立たないといふことを忘れてゐる保姆がありはしないか。日本は了見がせまいといふ。一年の保姆學校を終つて免狀を戴くと、もうあとはその免狀ひとつで世渡りができるものゝやうに考へる。學校といふものは將來の活きた仕事の判斷の資材を提供してくれるにすぎない。社會に順應した幼児教育といふものは結局經

營者及び保姆の頭の創造でなければならぬ。決して一年間の學校生活ばかりで世渡りはできない。自ら産みだす努力、苦しいが、そこに仕事のやりがひもある。從來の保育側に心の字があつても身の字がなかつた。結局そこらに家庭との眞の結びつきを得なかつた原因がありはしなかつたか。幼稚園保育所に對する眞の要求は家庭側からこそ大きな叫びとなつて出なければならぬ問題であるのに、農村保育所さへ開かれなかつたといふことは大いに検討すべき問題であらうと思ふ。

保健といふ問題は廿四時間生活から考へてもその根本の問題であつて、私的公的生活の基礎である筈であるが、多くの人は醫師に任せておけばよい問題、紙の上の學問の問題のやうに考へてゐる。よく考へてみるとおかしいことである。それだからこそ日本が現在世界一の結核國になり、末開國同様の不潔汚穢の中にひしめきあつてゐるのである。これは斷じて戰爭の影響ではない。國民の頭が自ら齎した因果である。こんなことはで浮ばれない。幼児に私的公的の保健指導をする御本人にこの問題の解決がない限り、徹底は期し得ない。これからの幼児教育の根本方針に健康保育がどんなに重要な役割を演ずるものか、充分に御考へ頂き度いことである。敢てアメリカの幼稚園を見よとは云はぬが、獨自な立場で日本的な保育を考へても、所詮は人類共通の問題である以上落ちつく所はきまつてゐるやうに思はれる。

○この頃の幼児保健問題

この頃の幼児の保健問題、考へてみれば誠にみちめな状態で可哀想な子供達である。客觀的に冷靜に記事を扱ふのが科學者の責任であるが、あまりにみちめで、堂々と世界に向つて發表する勇氣もないくらいである。榮養過誤に歸因する病氣の増加、傳染病わけでも結核の脅威、生活の不潔に歸因する病氣の増加、乃至は體力の減退、しかも子供達はその中にあつて嬉々として遊び戯れてゐるいぢらしさ。こんな社會的情勢の下に、不相變、歌の御稽古と、折紙と粘土細工と、紙芝居と遊戲が幼稚園のテーマであるとしたら、それは民衆に忘れられた幼稚園になつてしまひはしないか。社會ともつと結びついた幼稚園、單に集つてくる子供を相手としてゐるだけでなく、その母親その家庭をぐんぐん指導して兩者一體となる保育の形態、これは從來もいはれてゐながら充分に行はれなかつた問題であつたが、今度こそ眞剣に取りあげてみなければならぬ。先づ幼児の身を救へ。然して心を伸ばせ。健康保育は幼児にその基礎づけをする芽生えの大切な時である。國民學校も中學も引續いて健康保育を伸すべきである。この頃になつてアメリカ教育視察團と、GHQの公衆衛生部に指示されて漸く動きださうとしてゐるやうな情なさであるが、從來の長い間の國民的慣習からいつて、この問題が上からの指示となつて活潑に動き始める迄には時を要することであらう。保健の個人としてのあり方、社會人としてのあり方

その根元は幼児の健康保育に始るのであるから、この際幼稚園の出直しに當つて、當事者の方々によくよく考へて頂きたいと思ふ。

幼児教育の復刊に當つて見當違ひの考へを述べさせて頂いた譯であるが、これからは密接な連絡の下に新しい道を拓いてゆきたいものと思ふ。

満員電車の中で

『教へてみたいと思ひにならない』

『そりや、教へてみたいわ』

『だけれど、義務でないといふのね』

『ほんとにそうよ』

聞くとともにしに聞いてゐたが、氣がついて見ると、師範學校の女子部生らしい。

『それから、大きい子は、年が同じようじやないかしら』

『國民學校の下の級ならいゝでせう』

『でも、なんでもかんでもせう。むづかしいわ』

『そうね。幼稚園がいゝわ』

『かわいゝわねえ』

『わたし、いつそ幼稚園の先生にならうかしら』

『いゝわね、だけれど、小さい子のいるんなことしてやるの大變らしいわ』

『たゞ、いつしよに遊ぶだけでいゝんだといふけど』

「……」

電車が、ガタンとゆれた。少し位ゆれたつて、倒れなんかしない。ぎつしり身動きも出來ずにあるんだがら。